

おかざき彩子 参院選に全力を 第15回県本部委員会

挨拶する宮川敏一委員長



新社会党千葉県本部は、7月に予定されている参議員選挙に向けて第15回県本部委員会を開催しました。

長生村議選について

4月に行われた長生村議会議員選挙では、立候補者が定数いっぱいだったため、新社会党が推薦した2名の候補者を含め候補者全員が当選しました。

野田市議選について

5月に執行予定の野田市議会議員選挙については、女性の候補擁立に向け準備を進めてきましたが、候補予定者本人の体調不良につき立候補を断念せざるを得ませんでした。なお、来年の統一自治体選挙については、千葉市をはじめ、引き続き候補者擁立に向け

参議員選挙について

7月に予定されている参議院選挙では、社民党が呼びかけた共同名簿方式に参加し、比例区におかざき彩子さんが参議員千葉県選挙区については、小西ひろゆき参議員議員(現職)を支援することとします。主に以上のことを共有し、その他具体的な取り組みについても提案通り承認されました。

最高裁で「国の責任を認める」判決を

福島原発事故避難者訴訟 大きな山場に

千葉県原発訴訟の原告と家族を支援する会 永野 勇

2011年3月11日の東電福島第一原発事故による集団訴訟は、今4つの訴訟(千葉・群馬・生業・愛媛の各訴訟)が最高裁の場に

は5月16日(最高裁が今夏にも統一判断を示すことになりました。国の責任が認められれば、今行われている裁判で国の責任が確定すること、そして全被害者の救済に向けて大きな弾みとなるもので大変重要です。

このような状況の中で、4・15千葉訴訟最高裁口頭弁論当日を迎えました。当日はあいにくの雨でしたが、最高裁正門前に120人を超える人たちが参加して、この集いを盛り上げてく

口頭弁論終了後、一部の原告・弁護団が記者会見を行いました。報告集会では、弁護団から「やるべきことはやりきった」。裁判官の反応は比較的良かったとの報告を受け、原告からは、雨の中で参加者への感謝の言葉がありました。

四季へのいざない 出勤の皆にエールを燕の子 水明

俳句では単に「燕」と言えば春の季語、そして「燕の子」と言えば夏の季語となっている。燕は三、四月頃に姿を見せ始め、家の軒下や駅のホームの屋根裏などに巣を作る。燕は一度に凡そ五個程の卵を産む。その時期は五月と七月頃の二回。それぞれを一番子、二番子と呼んでいる。そんな燕の子が通勤の人達に送るエール。大きく開けた真赤な口。今日も一日「ガンバレ、ガンバレ」と。

最高裁は今年3月2日と3月30日の決定で、いずれも東京電力の上告を退け、国の基準を上回る賠償を命じた2番の判決が確定しました。

一方、国の責任については、口頭弁論を開いて(千葉は4月15日、群馬は4月22日、生業は4月25日、愛媛

の集会で皆さんの姿をみて涙が出ました。集会後は20人の傍聴者を除いて、衆議院第一議員会館第六会議室での、模擬法廷、報告集会に参加。模擬法廷は最高裁口頭弁論の再現でした。

努力することを決定しました。かざき彩子」と個人名を書いてもらうことが重要ですので、友人・知人に親書などで依頼しましょう。

参議員千葉県選挙区については、小西ひろゆき参議員議員(現職)を支援することとします。主に以上のことを共有し、その他具体的な取り組みについても提案通り承認されました。

訴の口頭弁論はトップバッターとしての責任を果たしたと感じました。最高裁が「国の責任」を認めた判決を出して欲しいと願わずにはいられない一人でした。

日本国憲法は猫に小判か

22年 千葉県憲法集会

とき 5月14日(土) 13:30 開始
ところ 千葉県教育会館新館 501 会議室
講師: 辛淑玉さん (明治大学客員教授・「のりこえねっと」共同代表)



「ハエも通れないように封鎖せよ」と、プーチン大統領が国防相に命じた。ウクライナ側が降伏して出てこなければ製鉄所の地下空間に閉じ込めようとする。だがそこには多くの市民も避難していること。そうであるなら、そもそもどっちが良いの悪いの、そんなことは庶民の命に関係ない。その人たちがも救えないようなら、どっちもどっちのクソどもだ。

戦争反対



そして、そんな状況を前にして、この国では、「敵基地攻撃能力」を「反撃能力」と言い換えるという。なるほど「武器輸出」を「装備品移転」とした例もあるが、目先を変え言葉の印象を変えても、問題の本質は変わらない。こうした重大問題を言葉で誤魔化するのは

【小出】

世界平和への岐路



もうやめろと言いたい。そしていつの間にか、裏で何やら派手に動き回っているのが例の元総理。中国の「脅威」を外国の新聞に寄稿して煽りまくる、米国は台湾を守ると明言すべきたのと、どこかの殿様にでもなられたか。そして自論の核兵器の共有だの敵基地に限らず敵の指揮系統中枢をも狙うべきだのと、留まるどころを知らぬがごとしだ。ご本人は戦争を抑止するためだと言っているようだが、脅し合いで保たれる「平和」などは砂上の楼閣である。国家とは何か、国民とは何か、戦争とは何か、そんな概念の中で人の命とはなんなのか、自分なりに改めて考えたいと思うのだが、まさに今、核兵器保持も含めた軍拡による抑止論に名実ともに引きずり込まれるか、あるいはそこから無縁の信頼に基づく平和な世界を築こうとするのか、その岐路にあると思う。